



Title	懷徳堂と中井履軒：「徳」解釈を中心に
Author(s)	池田，光子
Citation	大阪大学，2006，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46597
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	池 田 光 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 9 9 3 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 18 年 3 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学 位 論 文 名	懷徳堂と中井履軒－「徳」解釈を中心に－
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 湯 浅 邦 弘 (副査) 教 授 高 橋 文 治 講 師 辛 賢

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、申請者が長年にわたって調査・研究を進めている懷徳堂関係人物の内、特に中井履軒を取り上げ、その「徳」の解明という観点から、懷徳堂学派としての思想的特質を明らかにしようとするものである。中井履軒とは、懷徳堂第四代学主中井竹山の弟で、懷徳堂の中でも、最も大きな学問的業績を残した学者である。本論文の全体は、第一部「思想篇」と第二部「資料編」とからなる。

まず思想編は、「中井履軒の「徳」観」、「『逢原』における「仁」解釈」、「懷徳堂と履軒」の三章からなる。ここでは、キーワードである「徳」について、履軒の経学研究の集大成である『逢原』（『論語逢原』『孟子逢原』など）を主な資料として、関係概念である「利」「心」との関係にも留意しつつ考察を進める。また、「徳」と密接な関係にある「王」「覇」観を検討することにより、履軒の説く「徳」が為政者に向けて発せられた王道論の中で重要な位置を占めることを明らかにしている。さらに、この結論を補完するために、懷徳堂初代学主三宅石庵、第四代学主中井竹山、および伊藤仁斎、荻生徂徠など邦儒との比較検討も行っている。

これらの検討結果を総合的に踏まえ、申請者は、これまで、履軒の学問が懷徳堂とは一定の距離を置いた独自の「水哉館学」（水哉館とは履軒が懷徳堂を離れて開いた私塾の名）として捉えられてきたのに対して、「水哉館学」を、むしろ懷徳堂学の継承・発展として捉え直すべきであるとの結論を提示する。

次に、資料編は、「懷徳堂文庫の貴重資料」「第一次新田文庫」の二章からなる。ここでは、まず、懷徳堂文庫が形成される経緯を、明治二年の懷徳堂閉校時に遡って整理し、また、現在の懷徳堂文庫の現状・内訳を詳細に解説する。そして、昭和五十年代に懷徳堂文庫に新たに収蔵された新資料「新田文庫」について、その調査結果を基に関係資料の報告を行っている。

特に、『履軒弊帚』『左九羅帖』『竹山先生国字牘』について、これまでの懷徳堂研究では全く知られていなかった新発見の事実を提示し、新田文庫が懷徳堂研究に大きく寄与する資料群であることを明らかにしている。また、論考ではないが、『懷徳堂文庫図書目録』を補う資料として、新田文庫の詳細な目録を付載する。

論文審査の結果の要旨

懷徳堂の「徳」とは何か。本論文は、中井履軒の経書解釈を手がかりにこの大きな課題を追究しようとするものである。これまで、懷徳堂の研究は、主に中国哲学または日本思想史学の領域において進められてきた。ただそれらは個々の資料に対する個別的な検討が多く、懷徳堂学の全体を視野に入れた大きな研究としては、テツオ・ナジタ『懷徳堂—十八世紀日本の「徳」の諸相—』、陶徳民『懷徳堂朱子学の研究』が稀有な成果であった。これに対して、本論文は、規模は小さいながら、懷徳堂学と水哉館学とを「徳」というキーワードによって捉えようとした意欲的な研究である。こうした研究では、とかく「徳」の語のみが検討されがちになるが、本論文では、「徳」の関係概念として「利」「心」「王」「覇」などにも注目し、履軒における「徳」の意味をより明確にしようとしている。

また、『論語逢原』『孟子逢原』などを中心資料として、中井履軒の思想を主に取り上げているが、同時に、三宅石庵、中井竹山、伊藤仁斎、荻生徂徠など、周辺の学者との関係にも留意し、努めて履軒の特質を歴史的・相対的に捉えようとしている点も評価できる。

一方、第二部は、資料編ではあるが、この丹念な資料調査が第一部の思想編を支えていると言っても良い。これまで、懷徳堂文庫の調査は断続的に行われてきてはいるものの、『懷徳堂文庫図書目録』の不備を補うには至っておらず、近年蒐集の最重要資料である新田文庫については目録さえないという状況であった。本論文は、暫定版ではあるが、初めて新田文庫の総合目録を付載しており、懷徳堂研究、および大阪大学に多大の貢献をなしていると言えよう。また、そうした地道な調査の中から、具体的な新発見を提示している点も高く評価できる。

ただ、「徳」の思想を取り上げることの意義、すなわち問題意識が不明瞭であるため、思想編の論考にやや重厚さを欠く嫌いがある。例えば、邦儒が朱子学の体系とどのように向き合ったのか、懷徳堂学が近世日本思想史の上にどのように位置づけられるのかというような問題意識を鮮明にする必要があったろう。

とは言え、本論文の意義は大きく、今後、この研究を画期として、懷徳堂研究が飛躍的に進展すると期待される。よって本論文を博士（文学）の学位に値するものと認定する。